

寶篋印塔形式の三重塔と笠置山

佐々木利三

本誌主幹川勝太郎氏の學位獲得を記念して、別文に記述した各氏の論稿が揃えられることになった。そのことはいささか關與した私も一文を草せねばならぬ責を負うわけであるが、急遽間に合わせるためには適當なテーマが思い當らない。依つて更めて同氏が學位を得られた論稿である「日本石材工藝史」を開披して見ることにした。私が氏と「京都古銘聚記」の著を共にした昭和十六年からすれば十有七年を経過して、氏の資料の増加、整理の進捗に驚くべきものがある。深い敬意を表する次第である。其の間は戦時戦後と云う誰にも停滞の時代があるにもかかわらずである。省て甚だ忸怩たるを禁じ得ない。

しかしながら該書を通覽すると、私も少し考え足したいと思われる箇所が二、三ないではない。その一つをここに記して見よう。

寶篋印塔についてはこの書にも相當詳しく述べられてあり、かなりのスペースが割かれている。それだけに様式手法の變遷に興味の多いものである。その寶篋印塔の特徴づけられる大きな要素は、屋蓋の四隅に我を壓するが如く立つている隅飾り突起である。又それは婦人が觀る人の注目を集めんために凝せる誇大なる耳飾りの如くでもあつてこの屋蓋即ち笠の特徴の故に、これらを寶篋印塔の異形と見るべきか、一般の石層塔の毎重の屋蓋に寶篋印塔から影響された隅飾り突起が附加されたものかについて異論異見があつた。著者川勝氏は先年寶塔形式の石塔にも寶篋印塔屋蓋隅飾り突起の影響で、それがあつたものを指摘して、前記寶篋印塔式屋蓋の三重石塔を層塔の轉形と勘決されたのであつた。書中にも(四八頁)それが略記されてい

る(二五六頁には實例が指示されてある)。

この考え方は必ずしも決定的とは云えないと思うが、又然らずと云う確認もない。そしてここに二三例を附け加えて、少しでも右を結論に近づかせるに役立たせると共に、その新例に關連した私の見方を述べて見たい。

まず既知のものから略説して行くこととする。豊中市金禪寺塔は一番早く紹介されたものであるが、どれもがそうであるようにニケの基礎の上に塔身と屋蓋とを交互に三つづつ重ねてあるものである。その上には相輪が一本立つておつたらしいと推定される。

ことわつて置かねばならないのは、今残っている此の種の三重の塔が、皆もとの相輪を失つて、或ものは寶珠になり、或ものは新しい相輪と取替つている。それで何れの塔ももとのどんな相輪が立つておつたか決めかねる。始めから寶珠であつたのもあるかも知れない。此處のもこの例に洩れず、今は寶珠が載つているのである。そしてこの塔では一重目の屋蓋と二重目の塔身とが同一石で彫成されており二重目の屋蓋と三重目の塔身も亦同石彫成なのである。このことはこの塔が最初に發見された時に、幾つかの寶篋印

塔の殘骸を集めて來て、この塔をこの形に積み上げたものでないかと疑つた人に對する反論として大きな支援であつた。造立の頭初からこうした形で製作され、こうした形が其の頃に存在した實證として疑う餘地がないのである。今では此の金禪寺から程遠からぬ熊野田と云う所の寶珠寺に、小さいながら同種の塔二基があることが知られている。

この塔の一重目塔身には像容と種子を交えて四佛が彫顯されている。梵字である種子で、觀音が入つていことがわかるから、非常に異例の四佛である。なお基礎に貞和五年の年號銘があつて、吉野朝時代の作例であることも知られるのである。

次に南河内郡の東條村と云う所に龍泉寺と云う古刹がある。吉野朝の庭園遺構もある寺であるが、その參道に面して、この種の三重塔が立つている。石が凝灰岩質のもので風化が甚しく、完存の部分が少ないが、残つている部分からは吉野朝頃のものだと認められる。更に大阪市内の都島神社に、これの最優秀品を傳えている。最優秀品であるが、三重共塔身部を失つている。だから基礎の上に屋蓋三

つを重ねた形となつている。相輪も失われて新補品と取り替つている。基礎と三重の屋蓋とに初期寶篋印塔に見る豪宕な趣を保存されていることから、造立の年代も相當に遡れると認めていた處、^{嘉元二年}と云う年號が基礎から見出された。隅飾り突起の大きさと、屋蓋の幅に、毎重見事な遞減を示している。(口繪)

次に、近江の石山寺に有名な國寶多寶塔がある。その多寶塔の立つている廣場へ上る石階の脇に、この三重石塔が立つていて、これは各部共完存している。(口繪) 相輪部が寶珠であるのは原初からこの形式であつたことを示すものかも知れない。金禪寺塔と異つて、毎重屋蓋とその上の塔身とは何れも別石であつて、この點は都島神社のと同じである。こんなことであつたから、都島神社のは毎重共塔身を失つてしまつたのであろう。又都島神社のは毎重の幅に遞減が相當にあつたと云つたが、金禪寺塔やこの石山寺塔ではそれが非常に少ない。何れにしても普通の寶篋印塔だと屋蓋上端の作り出しが、六段位になつているのを、三重塔では一重目、二重目を二段位で打ち止め、三重目だけの段数を自由に行っているから、この屋蓋上端作り出しの具

合を見れば、よし斷片となつている場合でも、寶篋印塔形式の三重塔のものであつたことを確認出来る場合が多い。右の觀點から少し新しい資料を拾ひ歩いて見る。なお幾らか問題を含むものもあつても、此の種の石塔資料として役立つものは掲げて見たい。

第一に、近松寺と云うのは大津市三井寺園城寺の塔頭である。その三別所の一つである。高觀音の名で知られている。この近松寺の裏庭に優れた石塔斷片が幾つかあるが、その一つが圖に見るような六段の露盤をもつ寶篋印塔の笠部を三重に積み上げたものである。(口繪) 近年積み上げられたものと云うことであるから、間違ひなく寄せ寄せ塔ではあるが、笠部の幅は毎重氣持ちよい比例を持ち、第一層で一尺九寸、第二層で一尺四寸四分、第三層で一尺四寸である。又隅飾り突起も第一層では三弧を持ち、第二層で二弧、三層目では一弧と云う規律を保ち、且つ第一層では浮出し月輪内の梵字、第二層で無地、第三層は幅の廣い古調の區劃をつくつて、隅飾り突起と隣のそれに狭まれて持送り型の文様を彫出している。甚だ綿密にして典雅な裝飾と云うべきである。こう云う均整な所を見ると、前述した

三重塔であつた確證はつかめないものの、もとの一具であつた疑いは充分にある。塔身も像容の四佛であつて、甚だ立派であり、今の基礎には見事な三莖蓮華の文様がある。或は笠上露盤を六段にした代りに、二重目、三重目の塔身の省略が行われたかも知れぬ。そうなると始めに寶篋印塔の笠部を重ねたと云つた言葉は取り消さねばならぬ。

此の寺の縁先水鉢として使われている石塔断片は、これこそ又見事な寶篋印塔形屋蓋を倒置して、大きな水穴を穿つたものであるが、隅飾り突起も極めて古式、鎌倉

第一圖 新善光寺三重石塔



時代も中期に遡れるではないか思われるものであつて、笠上露盤はあきらかに三段、後世故意にもぎ取つて三段とした根迹は認めがたい。そうするとこれはあきらかに前述の三重塔の屋蓋に相違ない。大津近くにこの手法の塔がまだ存在したことを思わせるに足りる。

第二は、栗太郡栗東町に新善光寺と云うのがあつて、この庭園最奥部に三重石塔がある。(第一圖)笠部が寶篋印塔式であつて、露盤の段数がこれ亦每重共六段であるが、各重共塔身は具えている。そして少々大きさなどに不揃いがある。この塔では一重目塔身が、大面取式に角がなく、しかも寶塔式に首部を有することが注目されねばならぬ。多賀大社に近い胡宮神社の庭中にも、これより更に不揃いであるが、この式の遺物がある。大津の三井寺山内勸學院の庭中に、笠が三角式の寶塔があることは著聞しているが、その少し山手には、首部のある寶塔々身に寶篋印塔式笠部を載せた大石塔が組まれてある。(第二圖)新善光寺のものといふこれといふ、首部に載つかる笠部のおさまりはなかなかよろしいので、こう云う形式の塔の存在も肯定せねばならないと思う。



最後に注意したいのは、日本の石佛としてその彫刻の古

さと大きさを誇り、石佛信仰のふるさととも云うべき笠置の彌勒石の前に一基の石塔断片が立つている。(口輪)それは寶篋印塔の残骸と見えるので、そのように知る人は知つてゐる。基礎に元應元年(三一九)の年號のあることも判つてゐた。これをよく見ると基礎は一つ、塔身も一つ、屋蓋は二つあつて、上に相輪が立つている。戦前には屋蓋の一つが倒置されていたので、二つの寶篋印塔残骸と早合點されていた。昨年これを見直した時は、この倒置は正常に置き直されている。そして上端の作り出しは二段しかなく、切り

取つてかくの如くした形迹はない。もう一つこの手の屋蓋と、二つの塔身があると寶篋印塔形式の三重塔が、完全な復原を見ることがなる。詳細に見ると一重目屋蓋の隅飾り突起と、三重目となるべき六段の露盤をつけた屋蓋のそれとでは、大分に手法の相違も見られるし、幅も遞減がないと云うよりも、一重目の方が一方狭いと云う結末から見ても、此の塔の各部が原初の三重塔のそのの遺存とは遽かに決めがたいものの、一重目屋蓋一つを存することだけでも、もと此の種異形三重塔が存在した證左とすることは出来る。

そうして基礎にある元應の年時銘は、少くとも基礎とこの一重目屋蓋が同一時製作と見得る結果から、元應の異形三重石塔として、貴重な一例を加えたものと云い得よう。かてて加えて、ここは彌勒石佛のまん前である。信仰の地である。今大和文華館に藏せられる處の笠置曼荼羅の圖は笠置の信仰史研究に一大波紋を投じてゐる。後醍醐天皇の元弘の兵亂に焼け落ちたと云われる彌勒石像が著彩で書かれてゐるのである。又禮堂だと云われる廻廊風の建物も、書かれてゐるし、今石造十三重塔の立つてゐる所には

多武峯を思わす木造十三重塔が立つているように圖示されているのである。石佛の直前には金燈籠もあるように見える。がこの三重の異形石塔は畫かれていない。元應は元弘より前なのであつて、元應には彌勒もあざやかにおわした筈である。處で笠置曼荼羅は畫かれた年代について議論が闘わされていて、元弘以後に推想によつて畫かれたと云う考えと、元弘以前、鎌倉中期にかかれた筈との見解に分れている。彌勒如來の踏める蓮華座が、圖に畫かれているような踏み割れであつたか、一個の蓮華受座であつたかと云うような事と、又木造の十三重塔が、此の圖に畫かれているように建つたのは何の時であるかと云うようなことを決め手にしようとしてされている。しかしこれらの考え方は元應の異形石塔の存在を無視している。曼荼羅はこの塔の建つ前の繪か、この塔が後年他から移轉して來たか、塔があつても、繪が故意にそれを無視したか、の何れかである。そして今立つている石造十三重塔も様式から見て元弘以後に造られたものとはしがたい。だから元弘に木造塔が焼けてからの建立とは考えにくく、他から移轉して來たものか、そうでなければ、元弘以前にもここにあつたとせねばならぬ

い。元應—元弘の間に既に兩石塔が揃つてあつたとすると、曼荼羅に見られる景觀は元應よりまだ何年か前の様子で、それを寫したと考えねばならぬ。繪が不用意にこの異様の三重石塔を書き落すとは信じられないからである。そこで木造十三重塔その他の木造建築物が罹災退轉したのは元應以前であつたとすると、どれもこれも甚だ都合な解釋が出来ることとなる。元弘の兵亂による罹災も充分信じられることではあるものの、それ以前に今一回の焼亡があつた可能性も存在する。

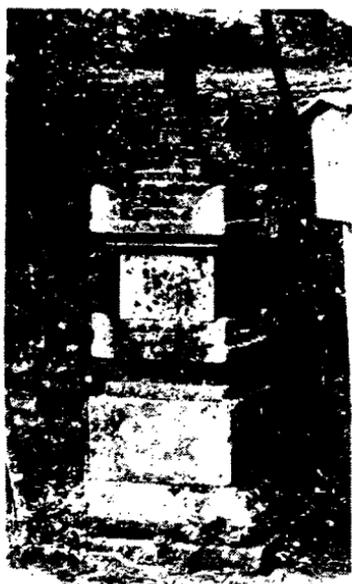
即ち元應以前の或時機に罹災があり、それまでに曼荼羅は圖繪せられた。焼けた建物は低い回廊様の建物と木造十三重塔などで、従つて本尊彌勒石像に損傷は少なかつた。ついで兩石塔の起立と共に高い禮堂は本堂の意味を以て彌勒石像により近接して復興され、これの元弘兵亂罹災によつて、本尊石像は焼隔てられることに成り終つたと推定する。異形三重石塔の起立からんで、笠置山伽藍の遷變に一推論を出したわけであるが、今回は前者の資料を取揃えたことのみを以て筆を擱く。後者の史料については又他日を期することとしたい。



近国寺三重石塔



都島神社三重石塔



笠置山三重石塔残蹟



石山寺三重石塔